

---

# 僕の仕事は悪役です。

朝丘緋夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の仕事は悪役です。

### 【Nコード】

N9497X

### 【作者名】

朝丘緋夜

### 【あらすじ】

英雄法。それは亜悪と国に認定された特殊犯罪者達を取り締まるために選ばれた英雄に様々な権限、資格を与える法律である。ゼンスと呼ばれる力を使い戦う英雄を援助するために作られた英雄法は、亜悪に苦しむ人々を救う唯一の手段である。と言うのが建前。本音のところ、実は僕達亜悪は、悪役の公務員なのです。仕事です。業務命令です。問い合わせは受け付けておりませんので悪しからず。

## 英雄法

時間は十二時四十五分。いつもなら三分の一も埋まることはない大学一の広さを誇る071大講義室が今日この時間に限っては学生で一杯で、それでもなお講義を聞こうと入ってくる人の波は途切れる事は無い。履修登録出来るのは二回生からだが講義室にいるのは二回生と三回生が殆どで、ちらほらと四回生もいるが、初々しい顔の学生は一回生だ。必修の講義をサボって見に来たのだろうか。よくある話だ。この講義は出欠を取らないので紛れる事が出来るのである。

071大講義室は平席と階段席に分かれていて、教壇に近い平席はもう開いている席が無い。三人掛けの机にびっしり三人座っていて、階段席の方も次第に隙間なく埋まって来ている。階段席の後ろにある観音扉には長い金髪を結い上げた一見軽薄そうな男が立っていて、全体を見ながら開いている席に学生を誘導している。彼は教授のアシスタントなのだ。上背がかなりある彼は人の波が途切れ始めた所で背伸びをすると、教壇に向かって大きく手を振った。すると教壇の脇から黒い髪を短く切り揃えた眼鏡の女性が颯爽と現れて筋の通った背を折り曲げて軽くお辞儀をした。喪服かと間違っほど黒いパンツスーツに皺が寄る。

「大変お待たせ致しました。これより松永教授による講義を始めさせていただきます。今しばらくお待ち下さい」

堅苦しい文句を言い終えた女性は再度お辞儀をすると、ちらりと視線を流して講義室の左脇を見た。前から五列目、左端の席。

つまり僕の座る席だ。

冗談半分で手を振って見ると、女性は鋭く僕を睨み付け、踵を返して教壇の脇に歩いて行ってしまった。飾り気の無い黒のヴァンプローファーが硬い足音を響かせる。入口に立っていた金髪の男がいつの間にか彼女の行く先で待っていて、壁に寄りかかり丈の長いブラウンのカーディガンをひらひらと揺らせて僕に手を振っていた。意外に若い顔は苦笑している。僕は肩をわざとらしく落として見せると彼は満足したように笑い女性と共に控え室に入ってしまった。

背もたれに寄りかかり一人笑っていると安っぽいチャイムが鳴り出し、時計を見ると既に50分を回っていた。やっと講義が始まるのだ。僕はこの席を取るために昼食を十分に済ませて三十分前からここで待っていた。一つ開けて静かな女の子が座っていたのだが席を探す四回生に頼まれて僕の隣に移っている。仄かに頬が赤いのはこの講義を心待ちにしていたからだろう。白のニットセーターを着ているのでびっくりするほど幼く見える。少々野暮ったいショートカットなのが残念だ。目はパッチリと大きく眉は殆ど手入れされていない。僕の方が気にしていそう。ついそう思ってしまい、僕は隠れて苦笑した。僕と比べたらこの子が可哀想だ。なんと言っても僕はプロのお世話になっているんだから。

「あ」

女の子は小さな声をあげて講義室の端、控え室の扉の方を見た。つられて僕も視線を向けると、先程の女性が一人の男性を連れて歩いて来ていた。ハリス・ツイードを着た初老の男性は、右手に持ったステッキを突いて女性の後ろを歩いている。短く揃えられた髪は灰を被ったように白く染まっているが顔はまだ若さを残していて、到底六十代とは思えない。右足を若干引きずるように歩いているが背は芯が通ったように伸びていて、未だに筋肉は衰えていないよう

に思える。シルバーフレームの眼鏡から柔和な視線を講義室に向けるとぐるりと見渡し、すぐに僕を見つけてにっこりと微笑んだ。流石教授だ。

松永教授が現れた事に気がついた生徒達は一斉に拍手を始め、講義室に割れんばかりの喝采が響き渡る。松永教授は微笑みを浮かべたまま教壇に立つと、左手にマイクを持って小さく一礼した。更に拍手が大きくなる。

「1961年。7月24日」

柔らかな、それでいて渋さと重さを持つ声が唐突にそう言うのと、講義室は一瞬で静まり返った。松永教授は目を瞑ると深く息を吸った。

「この日、世界に先駆けてある法律がこの国に生まれました。第二次大戦から16年後。もう70年以上も前の事です。この日公布された法律は世界的に見ても初めての試みでしたが、その後世界中で制定されていきました。憲法9条は残念ながら改正されてしまいましたが、この法律だけはだれも異論を唱えたことはありません。ただの一度もです」

講義室が静かに、だが確実に松永教授の言葉に浸食されていく。誰一人として音を立てないので、自分の呼吸の音がひどく大きなものに聞こえた。

「その法律は僅か24条からなる短いものです。ですが、その法律が与える恩恵は決して小さいものではありません。全ての国民に平和と安寧を与え、安らぎと、計りし得ない程の約束をしました。その法律の名前は」

声を切った松永教授は、ふと僕を見て微笑んだ。

「英雄法」

僕も松永教授に向かって微笑み返す。

「15回しかない、短い講義の時間だけで私は貴方達に英雄法について様々な事を教えたいと思います。二回生、三回生の方はどうかしっかりと学んで後学に生かして下さい。四回生の方は話半分で結構ですよ。就職活動に差し障りのないようにね。一回生の皆さんはあまり出ないようにね。遠坂先生にまた小言を言われてしまいますから」

講義室に軽い笑いが染み渡る。遠坂とはこの時間一回生が受けるはずの必修講義を教える教授の事だ。

「それでは講義を始めましょう。皆さんの知らない英雄法の素晴らしい役目と仕組みを。皆さんの将来に必ず必要となるでしょうから」  
それは僕にもですか？ と心の中で呟いて一人笑みを隠した。こ  
の中で今の言葉の意味を分かったのは僕とアシスタントの二人だけ  
だろう。英雄法のもう一つの名前を知る僕らだけが。

英雄のために作られた素晴らしき法。

隠されたもう一つの名は、悪役法と言う。

それは、国家規模で行われる壮大な一人相撲の顔。年間何十億を費やすヤラセ。

悪役と言つ名の、隠れた英雄の法だ。

## 悪役法

英雄法が出来た真実の経緯は、世界の正史からは既に抹消されてしまっている。現在世の中で知られている歴史は、国連で作られた偽物だ。きちんとした記録で残っているものは、能力の発見者の名前だけである。

その能力は過去、何度も呼び方を変えながら世界の記録に現れた。呪い。超能力。超常現象。幽霊。魔法。はたまた UFO や UMO 等と言った科学的に証明することが出来ない存在。それがなんなのかを発見したのは、ドイツ軍のある将校であった。時代は 20 世紀の始め、ちょうど第一次大戦が終わった頃であった。

彼は大戦を終えた後にある噂を耳にした。それは、どんなに激しい銃撃戦でも絶対に被弾しないと言う青年の話だった。彼はありふれた四方山話と思い信じていなかったのだが、軍編成の折りにその噂の兵士が自身の指揮する隊にやって来たのだ。確認すると、兵士は最前線に送られた一等兵だった。まだ幼さの残る、まともに銃も撃てない金髪の青年である。会って話を聞くと、確かに不自然な程怪我をしていない。青年は敵の攻撃をまったく受けていなかった。

この業界の者ならまず始めに教えられる話だ。彼の能力は『膜壁』と言う今ではごく初歩的な能力だ。大半のセンス保持者なら似たような事を簡単に出来る。空間に膜のような壁を作り異物と思った存在を拒絶する、基本的に防御専用の能力である。

将校は青年の能力を普通のものではないと即座に理解した。と言うのも、その青年の他にも噂になった兵士が何人かいたのだ。彼は軍部に報告し、すぐに極秘の研究所が作られた。敗戦国の切り札と

して使えると考えたのだ。

その将校の名はヴォルフガング・ケトラーと言う。悪役になったら一番始めに教えられる、僕らの世界では有名な軍人だ。

その後の記録は散漫で、簡略的なものしか残っていない。ドイツで見つかった能力が他の国で見つからない訳がなく、またナチスに傾倒していくドイツで軍事利用されない訳がなかった。第二次大戦の裏でセンス保持者同士の総力戦が繰り広げられた。

しかし、それは歴史に名を残さない戦いだった。

この能力に正式な名前が付けられたのは第二次大戦末期のアメリカ、核開発に追われるある研究所内であった。研究者の名前はロレンス・スミス。その後百年以上使われるその名前は、ニューセンスと言う。

直訳すれば新感覚。新しい知覚。もつとも、これは方便というかはつきり言ってしまうは元はスラングだった。ビッグバン理論みたいな蔑称をロレンス・スミスが使い始めたのだが、それがなぜか一般的な呼び方として流通しだし、いつの間にか公文書にまで使われるほど有名になってしまった。ニューセンスから飛び火して、僕ら能力者はセンス保持者と呼ばれるようになった。別にセンスが良いわけじゃないのさ。

この能力は、未だになんなのかはつきり分かってない。とりあえず名前は付けられたし細かく類別もされているのだけれども、なぜ僕らにニューセンスが現れたのか誰にも解明出来ていないのだ。

普通の人にはない感覚。

普通の人には理解出来ない感覚。

普通の人には持つことすら叶わない感覚。

普通の人と絶対に相容れない危険極まりない存在。

もう一つ隠された言葉がある。それは第二次大戦後に使われ始めた、僕らセンス保持者の総称だ。

その時代、センス保持者はヒューマンマイノリティ、人類少数者と呼ばれた。

講義が終わっても、僕はまだ講義室にいた。松永先生に挨拶をしておこうと思ったのだ。幸い、と言うかわざとなのだが次の講義を取らなかったで時間はまだたっぷりある。あわよくばコーヒーでも一緒に飲みたい。そう思っていたのだが、かなりの生徒が松永先生の所に話をしに行っていてとてもじゃないが時間を取れそうには見えなかった。

「なんかダメそうだな」

遠目に見ても二十人は囲んでいる。それも熱心な英雄信者ばかりだ。あの中に入るのは気が引ける。仕方がないので荷物を持ち立ち上がると、松永先生に向かって軽く会釈をした。多分気づくだろう。隣に座っていた女子が不思議そうに首を捻ったのはちょっと恥ずか

しかつたけど、とりあえず挨拶はしたので失礼にはならないはずだ。

そう思って帰ろうとしたのだが、急に捕まれた腕の所為でそうはいかなかった。仕事柄こう言う動作には敏感に反応してしまう。捕まれた腕を捻り逆に掴む手の関節を決めようと振り返った瞬間、額をぺちんと叩かれた。

「こら。きちんと挨拶をして行きなさい」

「あ、東西さん」

掴んでいたのは松永先生のアシスタント、と言うか松永研究室の院生である東西さんだった。先ほどはキリッとしたしかめ面だったが今はほどよく力の抜けた柔和な表情に戻っている。どことなく呆れ顔なのは愛嬌があるがちょっと怖い。

「なんか先生忙しそうだからまた今度にしようかなって」

「教授が他人行儀嫌いなもの知ってるじゃない」

東西さんは細い眉の端を下げてため息を吐くと手を離して腰に当たった。少しギクリとする。この感じはお姉さんの説教モードだ。

「まったく。あなたはいつもそうやって周りの雰囲気に合わせてばかりで自分の主張を蔑ろにして。だいたい」

「こら志乃ちゃん。後輩をあんま苛めないの」

背中に突然重みかのし掛かりぐへっと情けない声が出る。長い金髪が垂れ下がって来て、後ろにいるのが松永研究室のもう一人の院

生である夏目さんだと分かった。説教モードを途中で止められた東西さんは不機嫌そうに唸る。夏目さんは百八十センチを越える身長なので僕より頭一つ大きい。そして、正直苦しい。

「茶化さないで夏目。私は今説教してるんだから」

「うわ。志乃ちゃんなんでお姉さんモード？」

「夏目さん重いよ」

切実な頼みも虚しく夏目さんは僕に乗ったまま動こうとしない。お願いだから頭越しに会話しないで。周りの視線が痛いから。隣に座っていた女子は目を丸くしてこっちを凝視している。二人は有名人だという自覚がないのだ。滅多に受け入れない松永研究室の院生と言うステータスを二人は分かっていない。早く人目から逃れたい。

「明日輝あすけいくん。七緒明日輝あすけいくん」

……教壇で生徒に囲まれている松永先生が僕の名前をはつきりと大声で呼びながら大きく手を振った。講義室に残る全ての生徒が東西さんと夏目さんに絡まれている僕を見る。視線が痛い。隣に座っていた女子なんか頬を赤らめながら目を点にしまった。

「……どうして名前を叫ぶんですか」

夏目さんを背に乗せながら顔を上げると、満面の笑みを浮かべた松永先生が嬉しそうに僕の名前を連呼していた。周りを取り囲む英雄信者の顔が怖い。

僕の日頃の行いが悪かったのだろうか。精一杯の皮肉も、ついに言葉には出せなかった。

英華大学には学部が三つある。文学部。経済学部。そして法学部だ。文系に特化したあまりレベルの高くない大学だが、認知度はかなり高い。なぜかと言うと、松永先生がいるからだ。

松永和平名誉教授。世界的な法学者で英雄法の研究者だ。日本で英雄法学者と言えば松永先生かニユースによく出てる梅田望と言う東和大学の教授ぐらいだ。メディアによく出てる梅田教授と比べると顔はあまり知られていないのだが、松永先生の書いた英雄法についての本はベストセラーになった。時期柄と言うのもあったが、それでも驚くべきものである。

そんな松永先生の研究室は他の先生と比べるとかなり広いはずなのに、左右に並ぶ前後二段の本棚の所為でひどく狭いような錯覚を覚える。入ってすぐ横のシンクにはコーヒーマイルからそろっている先生自慢のキッチンがあり、研究室に入った人は必ずと言って良いほどコーヒーマイルを勧められるのだ。

「さてさて、明日輝君が研究室に来るのは久しぶりですねえ」

夏目さんと東西さんに挟まれて研究室に連れられて来た僕を笑顔で振り向き見た松永先生は、深く頷いてキッチンでお湯を沸かし始めた。僕を押し込むように研究室に入れた夏目さんが最後に外の廊下へ頭を出して辺りを確認すると、研究室のドアを閉めて二重に鍵

を閉めた。確か松永先生の研究室は防音だったはずである。とするところは密室になったと言う事か。もしかしていけるか。

「明日輝。顔に出てるわよ」

「あれ。出てました？」

不機嫌そうにため息を吐いた東西さんは先生に顔を向けた。先生は使いきったコーヒー豆の滓を平たいガラス皿に開けてテーブルの上に乗せようと手を伸ばしている。東西さんと目が合うと、にっこりと笑って頷いた。頂垂れる東西さん。

「さあさあ明日輝ちゃんも吸いなんせ吸いなんせ。研究室は禁煙の煽りなんざ受けちゃいないんだから」

勝手に研究室の奥まで入り窓の横の換気扇を回し始めた夏目さんは、長い茶色のカーディガンの内側を漁ると、中からゴールドペンバツトと安パイプ取り出した。一本抜いた両切り煙草を小さなパイプに擦り込み百円ライターで火を点ける。

「なんか安いですね」

「貧乏な院生だかね。これぐらいがちょうど良いのサ」

そのまま窓枠に腰かけて紫煙を吐き出す夏目さんを見て、東西が苛立たしげに灰皿を持って近寄っていく。なんだかねだであるの二人は相性が良いのだ。カバンを本やら雑誌やらで占領されかけている荷物台に置き煙草の箱を取り出し一本抜き取る。銘柄を見て松永先生が小さく笑った。

「ラッキーストライク  
幸運の一撃ですか。君らしいですね」

「そうですね？ そんなことは……あれ、ライターどこ行つたかな」

煙草の箱と一緒に入っていたガスライター（一応二百円だ）をどこかに落としてしまったようで、喫煙者にとってこれほど悲しいことはない。火の点けられない煙草などただの紙屑なのだ。夏目さんのライターを借りようと顔を上げた瞬間、目の前に火の玉のような青い焰が突然現れゆらりと輝いた。松永先生を見るとにっこりと笑いながら人差し指を焰に向けている。指を左右に振ると、焰も踊るように一緒に揺れた。ありがたく火を貰うことにする。

「この力も最近は煙草を吸う以外に使わなくなってきましたよ」

「」謙遜を」

先生は笑顔のまま指に息を吹きかけると、青い焰は一瞬で揺らめいて消えてしまった。軽く紫煙を吸い天井に向かって吐き出す。最近は喫煙者への風当たりが強くなってきていて、学内で堂々と煙草を吸える場所を確保するのにも一苦労なのだ。ゼミ生用のイスに腰掛けふと息をついた。

「英雄法初講義はどうでしたか？ と言つても、君はすでに知っていることばかりで退屈だったでしょうね」

「とんでもありません。僕が知っているのは裏の歴史の事ばかりでしたので面白かったですよ」

杖をテーブルに立てかけ向かいに座つた松永先生はジャケットの内ポケットからシガーケースを出し一本抜き取つた。銘柄は、げ、

ブラックストーンだよ。僕の視線に気が付いた先生は僅かに苦笑し、孫の漫画を読んでこれが吸いたくなりまして、と恥ずかしそうに啜えた。人差し指を黒い煙草の先に近づけると、また先ほどの青い焰が現れた。

「やっぱりお見事ですなえ。僕はまだ先生のように自然にはいきません」

青い焰を吹き消した松永先生は、ふと一瞬遠い目をして、僕の方に顔を向けた。

「こんなものはねえ、意味のないことですよ。できれば君には覚えてほしくありません。君は現代悪役幹部、七尾明日輝君なのですか」

「僕をこの業界に引き込んだあなたがそんな事言いますか？ 先代オイル悪役幹部、松永和平先生」

向かい合って素面では名乗れないような恥ずかしい名前を言い合った僕と先生は、静かに煙草を吸い紫煙を吐き出した。

そう。世界的に有名な英雄法学者である松永先生は、実は引退した悪役のトップだった。院生である夏目さんと東西さんはまだ現役の悪役幹部である。実績もかなりのものだ。

そして、僕、七尾明日輝ことダークアブソリュートは、松永先生ことフレイルパニッシャーの後を引き継いだ悪役のトップの一人なのである。



## 陰謀とレトロ

話は変わるが、英華大には幾つかのコミュニティがある。ゼミやサークルなんかは他の大学にもあるだろう。同郷の仲良しグループは閉鎖的過ぎるからコミュニティとは呼べないかな。我が大学では独自のコミュニティとしてENSなるネットワークサービスがあり、ポータルサイトと連動して学生への情報の発信や相互間交流を促している。

と、建前上はそうなっているものの。

運営管理その他諸々が学生の手には渡ってからはややゴシップ的な色を濃くし始め、学生情報なんかもやり取りされている。ここで彼女を見つけた友達も何人か知っているし、逆に悪い噂が流れてしまった人もいた。トピックス別に情報が管理され、チャットやWebメーラーまで完備されている。ポータルサイトのパスワードと連動しているので安全面とバッチリであり、ほぼ全ての学生が登録していると言っても過言ではないのだ。

そんなENSのトップページ、情報共有欄の一番上に、『急募！松永教授と親しくしていた七緒明日輝なる学生の情報求む！！』と言うスレが立てられていて、僕は携帯片手にがっくりと頂垂れしてしまった。スレを立てられるのは副管理人に指名された運営サークルの数人だけだ。つまりそれほどのスレ要請があったのだろう。明日には僕は有名人になってるかもしれない。

ただし、松永先生に取り入った正体不明の悪い奴と言う意味で、だ。

「どうかしましたか？ 明日輝君」

全ての元凶である松永先生がコーヒー片手ににっこりと笑っている。わざわざ高級なサイフォン式で入れたコーヒーは嫌味なほど美味しい。

「先生。さっきのわざとですよ？」

「ええ勿論」

やっぱり。

「今年こそ君を私のゼミに入れようと思ひまして。去年は最中先生のゼミに行きましたからねえ。なんとしても勝ちたいのですよ」

「誰に勝つんですか。と言うかもっと他に手段はあったでしょう。事務局の人に話を通すとか」

「既にお買収済みです」

「ば……買収って、冗談……」

松永先生はにっこりと笑い、無言でコーヒーをすすった。その無言の間が逆に怖い。

ENSが今の形になってから、幾つか議論されている話題がある。優しい言い方をすれば七不思議と言った感じだ。『購買の美人過ぎる店員さん達の謎』とか、『学内に生息する黒猫一家』なんてほのぼのしたものもある中、『松永教授と最中教授の因縁』と言う、かなりギスギスした噂がある。実際の所、因縁なんて言う可愛いもの

ではなく確執だ。知らない人も多いだろうが、大学内の派閥やグループは何も生徒だけのものではない。寧ろ教授同士の争いの方が陰険かつ陰惨なのだ。

最中先生の専門は哲学、詳しく言えば啓蒙主義から発生した英雄哲学である。対する松永教授は英雄法学者。一見仲良さげな分野であるが、裏事情を知っている僕から見れば単純な話だ。最中教授は昔、英雄だったのだ。

つまり、二人は今でも英雄と悪役の闘いをしているのである。

なぜ僕が去年最中教授のゼミに入ったかということ、ただ単に英雄哲学に興味があったからで、仕事に役立ちそうだと思ったからだ。幸い、最中教授は既に英雄と悪役の関係を知っている。だから大学で教授が出来るのだが、まあはつきり言えば数少ない裏事情に精通した人だ。悪役の立場は分かるが英雄の立場や思想を知っていて損はないかな、と言う軽い考えだったのだが、ここにそれが気に入らなかつた人がいた。

「もし君が他のゼミに面接やら申請やらを出していたとしても、絶対にこのゼミに来ます。これは規定事項ですから」

いつそ堂々とそう言い切った松永先生は、黒い煙草を取り出して恭しく火を点けた。甘い煙を細く長く吐き出して、にっこりと笑った。ほんの何年前までこの笑顔が恐ろしいほど苦手だったが、その頃の記憶が甦って来そうだ。去年、散々走り回ってゼミの面接を受けていた自分の姿が、悲しい記憶に変わってしまった。

やけに苦く感じるコーヒーを飲み干して、ふと携帯が赤く点滅していることに気がついた。赤いランプは仕事のメールである。

「あー、そろそろ帰ります。迎えの来る時間なので」

「仕事ですか？」

「ええまあ」

メールを開くと、絵文字もなにもない無機質な文面が出てきた。無題で一言、『到着迄後十分』と書いてある。簡潔過ぎて何だか分り辛いメールだ。松永先生は壁に貼つてあるカレンダーではなく手帳型の端末で日付を確認して、短い嘆息を上げた。

「今日は日野で敗北戦ですか。それにしてもまだ君は補助指揮官なんですなえ。私の後継なのに」

「大学生が主導指揮官なんてあり得ないでしょう。いくらなんでも」

荷物を持って立ち上がると東西さんと夏目さんが揃って手を振つた。二人とも苦笑気味なのは嫌みか。ため息を吐いて煙草をしまい背筋を伸ばす。松永先生に身体を向けて正式な、と言つても悪役式の敬礼なので左手なのだが、昔教わつたとおり、一部の隙の無い敬礼をした。

「ありがとうございます」

「いえいえ。頑張ってください」

退官したので敬礼できませんが、と前置きを入れて笑つた松永先生は、煙草を挟んだ指を小さく振って頷いた。

大学内の貸しロッカーには松竹梅の三つのグレードがある。月額と言う所に大学の商業的感覚を疑いたくなるが、荷物が多い僕は三千円の松コースだ。サークルの部屋やシャワー室なんか詰め込まれた八号館の一階に並ぶ貸しロッカーはいつも騒然としていて、ステッカーやポスター、落書きで埋め尽くされている。そんな所で携帯を見ながらロッカーの鍵を開けていると、再び来た事務連絡のメールに驚き手元が狂い暗証番号を押し間違えてしまった。

「僕に部下？　しかも幹部候補生って」

メールはさつきと同じ簡潔過ぎて伝わり難い文章で、『追記。本日幹候が配属』と書いてある。起承転結からどれくらい省いたらこんなに短く出来るのだろうか。

時間も無いので慌ててロッカーからヘルメットを出し、大学西口の駐車場へ走る。まだ四限の講義中の時間だが人は多く、その中を全力疾走している僕はかなり悪目立ちしてそうだ。だが時間に遅れて詰られるよりはマシと思い我慢。

駐車場横の溜まり場に着くと、大型バイク特有の唸るようなエンジン音が響いており、ちよつとした人ばかりになっていた。主に原付で大学に通う顔見知りである。嫌な予感が背筋を駆け上がり、振り返った知人の表情を見て泣きそうになった。

騒ぎの中心にいたのは、ダークブルーのライダースーツを身に纏い、されど上半身だけはファスナーを下ろしてシャツ一枚になった

細身の女性であった。乱暴に結われた髪には金色のメッシュが混じっていて、軽く日に焼けた肌はすらりと筋肉がついている。顔はレイバンの角張ったサングラスであまり分らないが、口を開く度に覗く鋭い犬歯はかなり特徴的だ。右手にはスカーレットのフルフェイスメットをぶら提げている。周りを囲う男達となにやら話が弾んでいるようで、時々ニヤリと笑って自身が跨がっているバイクを叩いて見せている。恐らく新調したのだろう。真新しくも旧型のバイクは、恐ろしいほど輝いている。

「太刀風さん」

名前を呼ぶと、太刀風さんはやっと僕に気がついたようで、ちらりと腕時計を見て苛立たしげに舌打ちした。

「遅い。もう八分も待ったぞ。迎えに来てやってんだから時間ぐらい守れ」

「タイミングが悪かったんだよ。それより、そのバイクはどうしたの？」

「どうしたって、買ったに決まってんじゃない？」

太刀風さんが乗っているのはCB750のラストモデルである。メタリックブルーにカラーリングされたそれは、写真でしか見たことが無いが、バイク乗りにとって実物を見ることは夢のような話だ。特に、今となっては。

「わざわざガソリン車に変えたの？ 前乗ってた電気二輪はどうしたのさ」

「知り合いに売った。やっぱりバイクって言ったらガソリンだろ」

誇らしげになだらかな胸を張った太刀風さんは、周りを囲う男達から賛同の言葉を受けて満足そうに犬歯を剥き出した。

化石燃料が一般的に用いられていたのは、最早二十年以上も前の話だ。今や生活の殆どが電気によって支えられており、その電気も原子力発電や自然エネルギーによって作られている。軌道エレベーターですら世界にいくつも作られた今では、化石燃料は採掘自体減少方向に向かっている、スタンドも充電専用の所が殆どだ。時々見かけてもリッター三百円を軽く越している。なんと言っても、税金が高い。殆ど娯楽目的にしかならなくなった旧世代の代物だ。

だからこそ、これほど盛り上がっているのだけでも。

「良いから乗れよ明日輝。仕事だ」

「その前に上着て」

今日の僕としては全然良くない。こんな目立つバイクで、しかもそんな目立つ格好で迎えに来られるとかなり悪目立ちする。周りの男達から「ENSの……」と言う言葉が聞こえて来て、少し泣きそうになった。努力して築き上げて来た僕のイメージがたった一日で崩れていくような気がする。松永先生に取り入ったCB750に乗る美女に送り向かいされている男。そんな噂はこれっぽっちも嬉しくない。

フルフェイスメットを被りライダースーツに袖を通した太刀風さんの後ろに乗ると、ギャラリィから唸るような歓声が上がった。何の歓声だそれは。半キャップのヘルメットを被り、カバンを背負っ

て前を留める。僕も普段はバイクに乗っているけど、それはハイパーカブ、つまり電動の50CCだ。十五倍の馬力を太刀風さんの運転で体感するとは、夢にも思わなかった。遺書でも書いとけばよかった。唸りを上げるエンジンは本物の内燃機関の音で、マフラーからは有害物質たっぷり排気ガスが吐き出され、それと同時に周りから冷やかすように口笛が鳴った。調子に乗った太刀風さんは更にエンジンを吹かすと、勢い良く走り出した。駐車場横の溜まり場は校門まで一直線だ。このまま行くつもりなのか。それにしても早すぎる。そう言えば、電動式と内燃式のエンジンでは、クラッチの切り方が違うという話を読んだことがあった。太刀風さんの左手が思いつきり緩められたのを見て、慌てて両腕に思いつきり力を込めた。

冷静に判断できたのは、そこまでだった。

傾く車体。耳を切る風。暴れる鼓動。叫ぶ太刀風さん。流れていく景色。遠のく意識。

あ、なんか綺麗な花畑が……

「は……吐く」

「なに、甘い、こと、言っただ、よおえ」

「そつちだつてふらふらじゃないか！」

普段は一時間かけて来る道のりを、たったの二十五分で駆け抜け

た太刀風さんは、止まると同時に地面にへたれ込んだ。僕は既に地面に沈んでいる。あれは凄かった。事故らなかつたのが不思議なくらいだ。途中でパトカーのサイレンが聞こえた気がするけど覚えていない。

息も切れ切れの状態で見開けると、そこは見慣れた地下駐車場だった。オーバーヒート寸前のナナハンが熱い。四つんばいの状態でぼろぼろのドアの前に進み、手紋認証装置に掌を当てた。プツプツ、と言うエラー音声が流れても離さず押し続け、三回ほど鳴った所でやっとピンポンと間の抜けた認証音声が流れた。同時に地面に崩れ落ちる。ぼろぼろのドアが内側に開き、中から着流しの男性がふらりと出て来てしゃがみ込んだ。大小の三つ揃え、つまり日本刀の柄が三本目に入る。少し掠れた、明るい声が聞こえた。

「旦那。なんとかここで寝てたら風邪引きますぞ」

明らかに面白がっている口調に、思わず泣きたくなった。顔を上げると、無精髭に幾筋かの刀傷が走った、童顔の男が口元に笑みを浮かべて覗き込んでいた。濃紺の着流しは少しぼろぼろで、顎鬚を擦る左手の下にはロレックスの腕時計がしてある。なんとも似合わない。

「斯道さん。そんな事言っていないで手貸して」

「へいへい。幾らでも」

手馴れた様子で肩に担ぎこまれて、同時に斯道さんは太刀風さんも肩に背負い上げた。唸りを上げる太刀風さん。快活に笑う斯道さん。

そこでふと、こんなとんでもない二人の他にもう一人部下ができるのか、と思っただら、なんだか目頭が熱くなってしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9497x/>

---

僕の仕事は悪役です。

2011年11月21日20時06分発行